

タイ王国少年院在院者の家族認知について

—家族画による類型化とその臨床像の検討—

中央研究所 奥村 晋
 東京少年鑑別所 石黒 裕子
 浦和少年鑑別所 藤掛 明

1 研究の目的

本研究の目的は、タイ王国で、非行を行った青少年をとりまく心理的な家族環境を調べようとするものである。これまで、タイをはじめとする東南アジアの調査には、社会学や人類学の立場から主として定住調査(フィールドワーク)が盛んに行われてきている。本研究では、臨床心理学の立場から、投影法の手法を用い、人々の家族生活の形態や行動次元の特徴を探るのではなく、個々の生活者の、彼をとりまく家族に関する認知イメージを探ろうとするものである。

こうした臨床心理学的な手法によるタイ王国の家族調査は、先行研究が見あたらない。それは次のような事情によるものと思われる。すなわち、日本や欧米社会においては、家族が確かな単位として現に存在し、人間関係の基本的枠組みとして機能していることに疑いはないが、それ以外の文化圏で、初めから家族を同様のものとして論じることができないからである(*1)。そのため、欧米や日本の家族モデルや、そうしたものを探る投影法の解釈枠組みを、そのまま生硬に適用していくことには問題がある。臨床心理学的な立場から投影法を用いる場合にも、こうした文化差による問題を考慮しながら、個々の家族認知に迫ってくための、方法上の工夫が必要となる。

そこで、本研究では、投影法の中でも、言語を介さずに、個々の被調査者の微妙な内的な世界を汲み取り得るものとして、描画法を採用した。また、描画の意味づけにあたっては、欧米や日本の既存の解釈枠組みから硬直に結論を導き出すことがないように留意した。具体的には、仮説を持たずに全体的な情報の特徴を抽出していく、多変量解析の手法を用いることにし、複数の描画情報の出現のまとまり具合から、逆にその情報の意味する内容を帰納的に推測するようにした。

なお、こうした方法論上の特徴を持つ本研究は、二義的には、タイ王国特有の描画の意味づけについて、一定の知見を得、投影法としての描画解釈の普遍性や相対性について、示唆を得ることをも目的としている。

2 研究1. 家族画の出現徴標の分析

(1) 目的

タイ王国の非行少年の家族画の特徴を、同種の日本の非行少年の調査と比較しながら、その相違点を明らかにすることを目的とする。

(2) 方法

ア 被調査者

タイ王国の非行少年の家族画は、タイ王国のバンコックに所在す少年院在院者が描いた、「わたしの家族」画で(*2)、その内訳は男子200人、女子120人である。いずれも少年院職員が個別に実施した。なお、いくつかの観点から、あらかじめ、一部の被調査者を分析対象から除いたため、本研究での実際の分析対象数は、男子127人、女子87人となった(*3)。

また、日本の非行少年の家族画については、脇野(1987)の日本の少年鑑別所に収容された非行少年、男子118人、女子53人の描いた「私の家族」画の調査結果を用いた。脇野の調査では描画は少年鑑別所内の少年の居室で個別に実施したものをを用いている。

イ 家族画の徴標調査の方法

家族画の、徴標を中心とした分析項目と基準については、Burnsら(1972)、脇野(1987)、田中(1987)、鷹村(1989)、藤掛(1989b)の文献を参考にして、表1のように設定した。また、比較対照となる分析項目が日本では報告されていないが(すなわち、日本の描画調査では、出現が少なく、従来分析されることがなかったが)、際だったものについては、最後にまとめて指摘した。

(3) 結果

家族画の徴標の出現調査の結果は、表2のとおりである。男女それぞれを、日本と比較し、各項目毎にそれぞれ χ^2 検定を行った。

その結果、男女共通して、タイ王国の非行少年では、日本と比べ、「自己像の省略」が少なく、「棒やシルエットでの人物表現」が多い。また、場所の評定では、「室内」「場所なし」が少なく、「戸外」が多い。また、事物の描写では「家屋」「木、草、花」「山」「道」が多く出現している。

タイ王国の男子非行少年を日本の男子非行少年と比較して見ると、人物群の動きでは、「非同一の動き」が多く、「動きなし」が少ない。テーマの評定では、「食事、団らん等」が少なく、「娯楽、スポーツ、散歩等」が多い。事物の描写では「流し台」が描かれず、「車」、「動物」、「太陽」が多く出現している。

タイ王国の女子非行少年を日本の女子非行少年と比較して見ると、最大人物像の「父親像」が多い。また、人物群の動きでは、「同一の動き」が多く、「動きなし」が少ない。また、テーマの評定では、「娯楽、スポーツ、散歩等」が多く、「なし、不明」が少ない。また、事物の描写では、「家具」が多くなっている。

(4) 考察

ア 男女共通の非行少年の特徴

異文化の文脈のなかでは、日本や欧米の家族画の解釈仮説をそのまま適用しても無理がある。そこで、ここでは、日本の非行臨床で一般的に意味づけられている事柄を一応羅列するにとどめる。後節にて描画徴標の出現パターンをひとつのまとまりとして意味づける過程で再度検討することにした。

まず、タイ王国の非行少年に共通して見られる特徴では、「自己像の省略」が少ないことがあげられる。一般に自己像の省略は「何らかの理由で家庭にうまく適応していない」(石川1986)「自分自身に否定的感情が強い場合、自分を含めた家族イメージが抱けない、つまり心理的距離がありすぎるとか、家族の一員意識が乏しい(場合)」(田中1989)等の仮説がわが国では示されている。これらの仮説の前提になっている事柄は、自己像を省略することで、家庭葛藤を表面化さ

せずに、家族イメージに直面しようとしている点である。したがって、そうした自己像の省略が少ないということは、肯定的な意味合いとして考えられている。

次に、「人物の棒、シルエット表現」が多いことが特徴として見られる。一般に棒等の表現は「テスト状況への抵抗」(加藤1986)や、「家族成員を人間らしく描くことを回避」(田中1989)といった否定的なニュアンスの仮説が立てられている。

次に、場所や物事の描写が、戸外の風景で、家屋や草花、山や道も多く描かれていることが特徴として見られる。一般にこうした屋外の画は、家族以外の他人が描き込まれることが多いために、「家族の一体感のなさ、描者の一員意識の低さ」(田中1989)といった仮説が示されている。ただし、こうした自然描写に関する特徴は、常識的に考えて、タイ王国の実際の生活環境や住居環境の影響をより直接受けていることは容易に想像できるものである。

イ 男子非行少年の特徴

男子非行少年の特徴として、人物群の動きでは「同一の動き」の出現は変わらないが、「動きなし」が少なく、「非同一の動き」が多くなっている。田中(1989)は、動的描画において、「一家団らん風画」「共同作業画」「各自行動画」の順に健全性が乏しくなると指摘し、武田(1989)は、各自行動タイプを「家庭内での葛藤が強く、不適応感を抱いている。家族との接触がかなり乏しく疎遠な者が多い。家庭が安定感を得られる場となりにくく、親の存在価値は否定的に捉えている者が多い。」と説明している。このように、一般にわが国では、非同一の家族画の意味合いは、家族の凝集性が乏しく、きわめて否定的に解釈される場合が多い。

次に、事物の描写で「動物」「太陽」が多く描かれることも特徴である。また、「室内」が少ないこと、「車」の描写が多いことも特徴である。これは先の男女共通の特徴として自然描写が多かったことと同様に、実際の生活環境の影響があることが想像できる。

ウ 女子非行少年の特徴

女子非行少年の特徴として、男子非行少年同様、人物の動きの違いがあげられる。女子の場合には、「動きなし」が少ない分、「同一の動き」が増えている。こうした特徴は概ね、家族の凝集性を示し、家庭が安定の場となっている等、肯定的に解釈される。ただし、同一の動きの描写については、家族についての理想や願望を表出する場合もあり、否定的な解釈が成り立つ余地もある。

次に、「家具」の描写の多いことも特徴としてあげられる。これは室内描写に際して、日本のように食卓や流し台、TVのような定番の家具や家庭製品が少なく、今回のような評定項目では、一般的な家具の描写の出現が増えることになったものと考えられる。一般的な家具に対する特定の解釈仮説はないが、画面全体を使って詳細に描き、人物が描かれない場合は「強い孤独感や空虚感」(鷹村1989)をさすとの指摘がある程度である。

エ その他の特徴

最後に、日本の調査において比較対照となる分析項目はないが、タイ王国の調査において、その特徴が際だっているものについて、ここで指摘することにする。

第一の特徴は、人物像が非常に小さく描かれることが多いことである。今回の調査対象となった家族画の、それぞれに一番大きく描かれた人物の上下の長さを測定したところ、男子で、平均56.12mm(SD=39.95, MAX=174, MIN=5)、女子で平均77.29mm(SD=44.38, MAX=190, MIN=6)となった。一般に日本の解釈仮説では、大きく描かれる人物について、その関心の大きさを指摘することは多いが、家族員がみな小さく描かれた家族画についての積極的な解釈仮説は見

あたらなかった。

そうした人物描写に関連した第二の特徴として、人物が拡散して配置されていることが多いこともあげられる。多くは屋外の風景であるためか、描かれた小さな人物があちこちにあるために、日本の家族画のような、家族の求心性を感じることができない。時には遠縁の親類や、血のつながりのない近所の人や見知らぬ通行人まで描き込まれており、家族画というよりは、知合い画といったニュアンスの画も僅かながら見られた。こうした描写は、前項アで示された、戸外の描写の解釈と同様に、一般にわが国では、否定的な意味づけが行われている。

第三の特徴として、出現は多いわけではないが、同一人物(少年本人であれ、親であれ)が、同じ画面に、複数登場し、描かれているものがあつた。これについては、日本での報告がなく、日本で描かれた場合にはかなり特異な作品と見なされると考えられる。

以上、タイ王国の非行少年の描いた家族画の徴標の出現調査を行い、その結果を日本の非行少年のものと比較し、その差を見た。また、タイ王国の家族画に多く見られた徴標については、一般に日本で行われている解釈仮説を羅列的に記した。

3 研究2. 家族画徴標の出現パターン分析

(1) 目的

家族画の主要な徴標を、変数として設定し、徴標の出現のパターン分析を行い、帰納的な立場から、家族画の類型化を行う。

(2) 方法

ア 被調査者

タイ王国の非行少年は、研究1(2)アと同様である。

イ 家族画の徴標のパターン分析の方法

家族画の、徴標を中心とした変数の項目については、藤掛(1989b)の文献を参考にし、偽りの相関が生じる項目や、出現の偏りが大きい項目を除いて、表3のような設定した。そして、それを林の数量化Ⅲ類の手法を用いて、出現のパターン分析を行った。また、林の数量化Ⅲ類によって、得られた各成分の成分得点と、家族画の事物の描写(偏りが大きく数量化の変数として用いなかった。)との相関を調べ、検定を行った。以上、二つの処理結果から、類型の意味するところを仮説した。

(3) 結果

家族画の主要な徴標の出現パターン分析の結果は、男女とも4成分まで求め、表4-a, bのとおりとなった。また、そこで得られた各成分と、家族画の事物の描写との相関を調べ、検定を行った結果は表5-a, bのとおりとなった。

(4) 考察

ア 男子の非行少年

(ア) 男子第1成分

第1成分に高い負荷量を示すものは、「占有面積：大」「場所：描写なし」「最大人物の大きさ：大」等の項目であった。また、事物の描写もほとんど描かれていない。これらの項目は、画

面に大きく人物群が描かれ、人物の背景の描写があまりない描画をさすものと考えられる。

人物を大きく描くことは、その人物に関心(肯定・否定に関わらず)を抱いていることを示している。しかし、背景や事物の描写がほとんど見られず、現実の生活感のある家族を描くこと自体には失敗(あるいは回避)していることがうかがわれる。したがって、第1成分は、「背景のない大きい家族の画」であり、「家族への関心は強いが、現実感のある家族全体像を十分には受け入れられない状態」を現しているものと考えられる。

(イ) 男子第2成分

第2成分に高い負荷量を示すものは、「占有面積：中」「自己像省略：あり」「人物群の動き：なし」等の項目であった。また、事物の描写も第1成分ほどではないにしろ、家屋やその周辺の描写が比較的少ない。これらの項目は、人物群の大きさは誇張も縮小もないが、人物間相互の動きがないのか、あるいは一人人物のみの描写であり、少年自身が描かれていない描画をさすものと考えられる。全体としての家族のイメージが表出されず、自分を含めて家族の多くが省略されている点で、ある種、深刻な葛藤の存在が汲み取れる。また家族の特定人物を描く場合には、関心の強い人物への何らかのこだわりを抱いていることが推測される。

したがって、第2成分は、「家族員の多くが省略されている画」であり、「深刻な家族葛藤があり、特定人物へのこだわりがある状態」を現しているものと考えられる。

(ウ) 男子第3成分

第3成分に高い負荷量を示すものは、「場所：室内」「最大人物の大きさ：小」「棒表現：あり」等の項目があり、対極には「自己像省略：あり」がある。これらの項目は、室内に小さい人物が描かれ、それも棒等の表現で描かれている描画をさすものと考えられる。先の研究1の結果で明かなように、タイ王国では戸外での家族の描写が多かった。おそらく住居環境上、戸外が一定の生活空間として機能しているものと思われるが、そうしたなかで、あえて室内を描く場合の意味合いは、日本とはかなり違うものがあるはずである。本研究での室内描写項目は、室内だけを描く場合と、室内外を描く場合との双方を含むが(表3参照)、この成分の場合は、室内だけを描き、戸外という大きな開かれた空間よりも、閉じられた狭い空間に家族を描こうとする行為と考えられ、家族の凝集性を必死に確保しようとする意図が見える。また、こうした際の人物の小さい描写や棒状の表現は、個々の人物の持つニュアンスを捨ててでも、小さく固まる家族の一体感を表現しようとした結果であると考えられる。この点でタイ王国に多く出現する棒状の人物表現や小サイズの人物表現の少なくともその一部は、こうした凝集性を強調する際の表現であることが推察される。

以上のことから、第3成分は、「室内等に、小さく凝集した家族の画」であり、「家族の一体感を願い、こだわっている状態」を現しているものと考えられる。

(エ) 男子第4成分

第4成分に高い負荷量を示すものには、「人物群の動き：非同一」「場所：室内」等の項目があり、対極には「占有面積：中」「人物群の動き：同一」等の項目がある。これらの項目から見ると、人物群に動きがあるが、その動きがばらばらであり、家族が非同一の動きをする描画をさすものと考えられる。先の研究1で明らかになったように、タイ王国では、動きのある家族画が多く出現し、かつ男子では非同一の画が多く見られている。この成分にはそうした非同一の典型的な家族画が集まっているものと考えられる。また、このように動きのある人物群の描写の場合、室内外にわたって人物が描かれ、室内外でそれぞれ違った行動する人物群が存在することから、

非同一となったものと考えられる。こうした非同一の家族の動きは、相互交渉の希薄さか、家族の成員の特徴(役割)を明確に認知し、個々の家族のイメージ化の容易性が読み取れる。

したがって、第4成分は、「動きはあるが、非同一の画」であり、「相互交流が稀薄である、結び付きの弱い状態」を現しているものと考えられる。

イ 女子の非行少年

(ア) 女子第1成分

第1成分に高い負荷量を示すものは、「占有面積：小」「場所：室内」「最大人物の大きさ：小」「棒表現：あり」等の項目であった。また、「家屋」やその周辺の背景が描き込まれている。これらの項目は、室内に小さい人物や、棒等の人物表現で描かれている描画をさすものと考えられる。また、占有面積の小さい分、室内画の周辺の余白に、周辺の景色もあわせ描かれる傾向にある。先の、男子の第3成分と概ね重なり、同じ論拠から、この第1成分は、「室内等に、小さく凝集した家族の画」であり、「家族の一体感を願い、こだわっている状態」を現しているものと考えられる。

(イ) 女子第2成分

第2成分に高い負荷量を示すものは、「自己像の省略：あり」「場所：描写なし」「人物群の動き：なし」等の項目であった。また、事物の描写もあまり描かれていない。これらの項目は、人物間相互の動きがないのか、あるいは一人人物のみの描写であり、少年自身も描かれていないもので、背景の描写のない描画をさしているものと考えられる。先の男子の第2成分に概ね重なり、同じ論拠から、この第2成分は、「家族員の多くが省略されている画」であり、「深刻な家族葛藤があり、特定人物へのこだわりがある状態」を現していると考えられる。

(ウ) 女子第3成分

第3成分高い負荷量を示すものは、「占有面積：大」「場所：室内」「最大人物の大きさ：小」であり、「最大人物の大きさ：大」も比較的高い負荷量を示している。また、食卓や家具等の調度品等の描写も見られる。これらの項目は、室内の日常生活を描き、個々の人物の大きさにかかわらず、画面を大きく使っている描画をさすものと考えられる。第1成分と比較すると、家屋周辺の描写がなくなり、その分、室内の描写が細かく行われ、空間を大きく使っているために、人物はやや距離をとって配置されているものと考えられる。

このように、描画全般を大きく描き、周囲の環境を見ずに、家族や家族が生活する室内の事物にのみ注意を向けて描くことは、自分や自分の家族への関心の大きさや家族イメージの主観的な受けとめ方を現しており、好悪感情のいずれにしても、家族からの影響を大きく受けていることを示している。したがって、この第3成分は、「周囲を見ずに、大きく、接近して家族を見る画」であり、「家族への関心が高く、その影響を大きく受けている状態」を現しているものと考えられる。この成分については、先の男子の諸成分と重なるものが見られない。

(エ) 女子第4成分

第4成分に高い負荷量を示すものは、「占有空間：小」「人物群の動き：非同一」「自己像の省略：あり」等の項目であった。また、動物や山の描写が多く見られた。これらの項目は、人物群の動きが非同一であり、人物群が小さく描かれており、背景には比較的自然が描かれている描画をさすものと考えられる。先の、男子の第4成分と概ね重なり、自己像が省略されている分だけ、いっそう交流が希薄なものと考えられる。したがって、同じ論拠から、この第4成分は、「動きはあるが、非同一の画」であり、「家族の相互交流が希薄である、結び付きの弱い状態」

を現しているものと考えられる。

以上、数量化Ⅲ類による分析の結果、非行少年の家族画成分として、4つの成分を抽出し、その成分得点の高い項目から、その成分の内容を従来我が国で行われている解釈枠組によって解釈した。

4 研究3. 家族画類型の典型例の臨床的検討

(1) 目的

上記、研究2で得られた、男女それぞれの家族画の4成分(4類型)を、臨床的な観点から検討し、その臨床像を明らかにする。

(2) 方法

ア 被調査者

タイ王国の非行少年は、研究1(2)アと同様であるが、そのうち各成分得点の高位のものを、その成分の典型事例とみなし、分析対象とする。

イ 臨床像の検討方法

典型と見なされた事例について、実際に家族画を実施した少年院職員が作成したケース記録を基に、検討を行う。そして、典型事例に共通して見られる家族イメージを要約し、先の家族画成分の解釈との対応関係を見る。

(3) 結果と考察

ア 男子非行少年

(ア) 男子第1成分の高い典型事例

第1成分に高い成分得点を示す上位2事例を概観すると、描画は、1例が家族5人の横並び画で、もう1例が家族3人の横並び画であった(図1)。双方とも、父親が中央で最大のサイズで描かれている。

先に第1成分を、家族への関心が強いが、現実感のある家族像を受け入れられない状態にあるものと考えたが、この2例とも概ね該当する。双方とも、親の喧嘩が頻繁に行われ葛藤が日常化していることが共通し、それも父親が母親を攻撃するため、少年の父親への反発のニュアンスが汲み取れる。また、家族形態に大きな欠けがなく両親が揃い、多くの兄弟に囲まれているが、いずれも少年が親と離れて生活する経験(1例が義母の別居。1例が少年の親類宅への寄宿。)をもつ等、家族全体としての結び付きは弱く、混乱しており、そのことへの不満もある。家族が仲良く暮らしていくことへの願いは強いが、家族が実際に円満にまとまって生活した経験が乏しく、現実味や、日常感覚にあふれる家族イメージが持てないという状態といえることができる。

(イ) 男子第2成分の高い典型事例

第2成分に高い成分得点を示す上位2事例を概観すると、描画は、家屋が透視され、2人の人物が並んでいる画と、庭先で食事を調理している一人人物画であった(図2)。

先の第2成分を、深刻な家族葛藤があり、特定人物へのこだわりを内容とすると考えたが、この2例ともほぼ該当する。描かれた特定人物はいずれも少年の数少ない依存対象となっている人物で(1例が母親と妹。1例が祖母。)、他の家族との葛藤は大きく、家族の形態としても崩れが大きい。家族への不満や葛藤が大きいとはいえ、こだわりは残り、親和できる特定の人物を心の

向けどころとして、かろうじて適応を図ろうとしており、適応状態としては非常に悪化していると考えられる。

(ウ) 男子第3成分の高い典型事例

第3成分に高い成分得点を示す上位2事例を概観すると、描画は、家屋の二つの窓から二人ずつ顔をのぞかせている画と、小さな家屋が透視され、2人の人物が棒状に並んでいる画であった(図3)。

先の第3成分を、家族の一体感を願い、こだわっている状態と考えたが、この2例も概ね該当する。母親が家族をとりしきっており(1例は実父が別居。1例は母娘連合。)、父親の存在感が薄い、父親との葛藤は表面化していない。葛藤を表面化させずに、ある程度家族を理想化し、親に期待することで安定を保っていることがうかがわれる。少年の描画にも父親と自分を結び付けて(1例が家屋内。1例が窓枠内。)描き、そうした父親を排除するのではなく、そうした父親に同一視するような形で父親を含めた家族像を慕い求めている。家族に生々しい葛藤がないという点で、表向き平穏さを保っている状態にあると考えられる。

(エ) 男子第4成分の高い典型事例

第4成分に高い成分得点を示す上位2事例を概観すると、描画は、共に家の内外でそれぞれに働く家族の姿が描かれている画であった。(図4)。

先の第4成分を、相互交流が希薄である、結び付きの弱い状態と考えたが、この2例については、あまり対応していない。交流が特別に希薄であるというよりは、それぞれの活動(仕事)に忙しく、個々に動きまわっているといった状態にある。共に経済的には貧しく、父親が権威を持ち、母親の影響力が弱い(1例が大酒癖。1例が病気療養中。)状態にある。したがって、この臨床的検討により、先の第4成分の解釈は修正する必要があることが明らかになった。したがって、第4成分の「動きのある非同一の画」は、「家族員個々が自分の役割を担い、個々に活動している状態」を現しているものと考えられ、典型事例においては、家族に問題がないわけではないが、適応状態が大きく悪化していない状態が認められた。

イ 女子非行少年

(ア) 女子第1成分の高い典型事例

第1成分に高い成分得点を示す上位2事例を概観すると、描画は、それぞれ小さな家屋が透視され、その中に小さな人物で家族が描かれた画であった。(図5)。

先の第1成分を、家族の一体感を願い、こだわっている状態と考えたが、この2例も概ね該当する。家族に満たされない寂しさがあるが、真っ向から親の愛情や保護を求めるのではなく、むしろ期待し、依存心を向けている状態にある。特に1例では昔に比べて生々しい葛藤がおさまりつつある。描画も理想の家族像を描いたものと解せる。

(イ) 女子第2成分の高い典型事例

第2成分に高い成分得点を示す上位2事例を概観すると、描画は、2人の並列画と4人の並列画であった。(図6)。

先の第2成分を、深刻な家族葛藤があり、特定人物へのこだわりを内容とすると考えたが、この2例ともほぼ該当する。家族内の葛藤(2例とも、両親の喧嘩、対立が激しい。)が大きく、家族の形態もかなり崩れ、離散に近い。悩みがあっても親には相談ができず、現在の少年自身の葛藤や混乱は深刻なものと考えられる。

(ウ) 女子第3成分の高い典型事例

第3成分に高い成分得点を示す上位3事例を概観すると、描画は、比較的大きい人物群が室内で過ごす画や、小さい人物群が室内で食事をとる画、また、自宅のあるビルとその内部の様子を小さな人物群で描いた画といった具合に、描画全体の雰囲気のもっとく違うものが集まっている。ただ、小さい人物でも完全には密集しておらず、家の外の描写がないために、女子の第1成分とは異なるし、人物群が同じ動きをしてはいないが、所詮みな室内で動いており、女子の第4成分ともやはり異なっている。

さきに、第3成分を、家族への関心が高く、その影響を大きく受けている状態と考えたが、各事例を見ると、裕福な家庭で保護された一人っ子が家族に満足していたり、貧困で疎外されている多子家庭の子が家族に絶望していたりして、事例レベルでは、共通した特徴を指摘できない。ただ、物事の認知にあたって、主観的に「周囲を見ずに、大きく、接近していく」あり方を持っており、何等かの理由で家族との距離がとれない状態にあることはある程度推察することが可能であろう。

したがって、この成分については、描画において、まとまりが悪く、事例検討においても、臨床的な意味づけが十分にできなかったために、成分の命名と意味づけを保留する。

(エ) 女子第4成分の高い典型事例

第4成分に高い成分得点を示す上位2事例を概観すると、描画は、戸外でそれぞれ働く家族の画と、戸外で別の動きをする二人画であった。(図7)。

先の第4成分を、相互交流が希薄である、結び付きの弱い状態と考えたが、この2例については、あまり対応していない。交流が特別に希薄であるというよりは、それぞれの活動(仕事)に忙しくしている。特に父親の存在感や役割が弱く(1例は父親の離婚による生別、1例はかなり内向型の人)、母親が家庭を支えている。母親はしっかり者だが口うるさい。家族は生活のために働くことに追われているニュアンスも汲み取れる。したがって、この臨床的検討により、先の第4成分の解釈は修正する必要があることが明らかになった。この第4成分の「動きのある非同一の画」は、「家族員個々が自分の役割を担い、個々に活動している状態」を現しているものと考えられ、典型事例においては、家族に問題がないわけではないが、適応状態が大きく悪化してはいない状態が認められた。

ウ 各成分の臨床上の比較

临床上、葛藤の大きさと家族への適応の度合の観点から比較すると、まず、「家族成員の多くが省略されている画」(男子第2成分、女子第2成分)が、最も深刻化している。保護機能が乏しく、家族の形態の崩れも大きくなっており、そうした結び付きの弱い状態の中で、かろうじて特定の人物に、親和感情や両価感情を向けている状態にある。「背景のない大きい家族の画」(男子第1成分、女子なし)も省略画ほどではないにしろ、家族の形態が崩れ、葛藤が大きいものがある。そうした家族への不満は大きい、家族への関心や帰属感情は一応保たれており、やや混乱している状態にある。

他の二つの家族画の臨床像は、家族の生々しい葛藤がそれほど表面化していない。「室内等に、小さく凝集している家族の画」(男子第3成分、女子第1成分)は、いわば理想的な領域で家族イメージを成立させているだけに、親や家族に対する期待や依存心が強い。一方、「動きはあるが、非同一の画」(男子第4成分、女子第4成分)は、むしろ親以上に家庭を支えている面もあり、目先の課題に追われている状態が見られた。

なお、「周囲を見ずに、大きく接近して家族を見る画」(男子なし、女子第3成分)については、

臨床像のまとまりがなく、比較ができなかった。

以上、家族画の各成分(類型)の典型事例についてその臨床像を検討し、先の成分の命名と対応関係を見た上で、各成分の比較を行った。それぞれをまとめると、表6のとおりになる。

5 研究4. タイ王国の家族画と日本の家族画の比較

(1) 目的

上記、研究3で明らかになったタイ王国の家族画類型を、同様の方法で作成された日本の非行少年の家族画類型と比較することで、その文化差による特徴を明らかにする。また、類型化によって示唆されたタイ王国特有の家族画の解釈仮説についてもまとめる。

(2) 方法

タイ王国の非行少年の家族画類型については、本研究(研究2, 3)のものを用い、比較する日本の非行少年の家族画については、藤掛(1989b)が日本の少年鑑別所に在所中の非行少年、男子106人の家族画(*4)に、林の数量化Ⅲ類を行い設定した類型(表7)を用いた。比較にあたっては、各類型の命名根拠となっている徴標と実際の臨床像を検討し、考察を加える。

(3) 結果と考察

ア 類型の比較

各類型の中で類似したもの同士をまとめたのが表8である。まず、深刻な家族葛藤があり、家族の崩壊、離散といった崩れのなかで、家族イメージさえ十分に成立させられない少年たちは、タイ王国でも、日本でも共通して見られた。

「家族員の多くの省略画」(タイ男子第2成分, タイ女子第2成分)及び、「家族イメージ不成立画」(日本男子第1成分)の各類型である。

他については各類型ごとに、何らかの相違が見られた。まず徴標の出現とそのまとまり方が同じであるにもかかわらず、その意味するところが全く違ったものとして、「動きがあるが、非同一の画」(タイ男子第4成分, タイ女子第4成分, 日本男子第4成分)がある。これは日本では、相互交流が希薄であり、家族葛藤の大きなサインとなるのに対して、タイ王国では、家族員個々に自分の役割を担おうとして忙しく動きまわっている意味合いが強く、家族に不満はあるものの、大きな葛藤は見られない。こうした家族に動きの同一性についての読み取りは、家族画解釈の根幹をなしており、そうした点での相違、それも相反するような相違が見られたことは非常に興味深いことである。おそらくは、家族画以前の家族観や基本的な集団関係の結び方についての感覚自体が、各文化によって違うということであり、少なくとも、日本(そして欧米)とタイ王国では、異なる家族観が存在するということになるのであろう。Embree(1950)がタイ社会を素材に提供した、「ゆるやかな構造をもった社会(a loosely-structured society)という説明原理が、こうした家族の動きの意味合いの相違にも適用できると考えられる>(*5)。タイ王国の家族関係では、個人の判断による行動の許容範囲が広く、日本の家族像のような強い求心性が働いていないために、家族の動きの同一性という基本的な事柄について、こうした意味づけの違いが現れたものと考えられる。

次に、比較的共通性が見られる臨床像が見られたが、徴標上には相違点があった類型として、「小さく凝集した室内画」(タイ男子第3成分, タイ女子第1成分)と「小サイズの屋外レジャー

の画」(日本男子第2成分)があげられる。これらは、臨床像では、家族の一体感を願い、理想や願望の家族像を抽出しているのだが、徴標レベルでは、家族員を小さく描き凝集させているが、場所が日本では屋外、タイ王国では、室内と対照的となっている。先の徴標調査でも明らかなように、日本にとって、屋外の自然のなかでの団らんは、非日常であり、タイ王国では、室内に集合しての団らんが、非日常としてのニュアンスをかきたてるものがあるということであろう。ついでながら、タイ王国では、室内と言っても透視された小さな家屋の中に家族が描かれることが多くこうした特徴は、家屋の縁どりの線で、一種の包囲(encapsulation)や区分化(compartmentalization)を行っていることになり、本類型では、主として一体化を望み、外界から家族を遮断するような意味合いを帯びている。

次に、徴標上も、臨床上也も違いが、その類型を特徴づけているものが共通していると考えられたものに、「背景のない大きな家族画」(タイ男子第1成分)、「接近して家族をみる画」(タイ女子第3成分、ただし、臨床的意味づけを保留)、「見おろした食卓プロットの画」(日本男子第3成分)がある。これらは、いずれも家族像との距離のとり方に特徴があるもので、タイ王国では家族への接近的なかかわりとして、日本では家族への遠望的なかかわり方として現れている。先の「ゆるやかな関係」にも関連するが、タイでは家族がいわば遠心的にまとまっているために、何か家族に対する葛藤が生じ、それを家族との距離の置き方で対処しようとするときには、いきおい接近する努力が必要となり、日本のように求心的なまとまりが強い場合には、逆に離れる努力が必要になると考えることができる。

イ タイ王国の家族画徴標の意味づけ

類型化により、タイ王国特有の家族画徴標の意味づけが示されたものは、以下のようなものである。

(ア) 棒表現

棒表現の有無については、男子1(負)、3成分、女子1成分のパターンに見られたように棒表現の出現が、凝集した家族像と結び付いて描かれた場合には、個々の人物の持つニュアンスを捨てても、小さく固まる家族の一体感を表現しようとした結果と考えられ、比較的肯定的な意味づけが示された。

(イ) 室内と戸外

室内に描かれた家族像は、男子3成分、女子1成分のパターンに見られたように、主として家屋が透視されて描かれており、外界からの圧力を遮断するような包囲や区分化の効果が引き出されていて、家族の凝集性の表現の意味づけが示された。また、戸外での家族像の描出は、タイ王国でのポピュラー反応であり、他の様々な徴標と結び付いているために、各成分のパターンには影響しなかった。戸外自体をもって、家族像の肯否定を意味づけることはできない。少なくとも日本の家族画解釈に見られるような特別に否定的な意味合いはないと考えられる。

(ウ) 家族の非同一の動き

家族の非同一の動きは、男子4成分、女子4成分のパターンに見られたように、家族がそれぞれに役割を担い活動していることが示された。また、男子2成分(負)、女子2成分(負)のパターンに見られたように、家族イメージの不成立の画の対局にも出現している。こうしたことから、非同一の意味づけは、肯定的な意味づけが示された。

(エ) その他の特徴

先に①人物像が小さい、②人物が戸外で拡散、③同一人物が複数登場といった項目を、日本と

の比較項目以外の特徴として指摘した。これらの各特徴は、戸外や自然がポピュラー反応であり、人物像が小さい場合には、その凝集表現として、拡散した人物配置の場合には、非同一のゆるやかな結び付きとして、それぞれ描かれる場合が多く、それ自体で否定的な意味合いはない。同一人物の複数登場は、小さく人物を描きながら、家族の複数の場面を第三者に満足気に紹介しようとする意図があるようで、パターンとしては概ね男子第3成分、女子第1成分に帰属する性質のものとして推察される。

以上、タイ王国の家族画類型と日本の家族画類型の比較を行い、また、タイ王国特有の意味づけが見られた家族画徴標について考察した。

6 まとめ

本研究では、家族画を用いることにより、タイ王国の非行少年の、描画に現れた家族認知の分析を試み、以下のことが明らかとなった。

(1) タイ王国の少年院在院者の描いた家族画を、男女それぞれに、数量化Ⅲ類により、主要な家族画徴標の出現のパターン分析を行い、各4成分を求めた。男子では、①背景のない大家族画、②家族員の多くの省略画、③小さく凝集した室内画、④動きはあるが非同一画、女子では①小さく凝集した室内画、②家族員の多くの省略画、③接近して家族を見る画、④動きはあるが非同一画が、抽出された。

(2) 各成分の典型事例を臨床的に検討したところ、男子1成分の「背景のない大家族画」は、家族への関心が強いが現実の家族像を十分に受け入れられない状態にあることが示された。男子第2成分、女子第2成分の「家族員の多くの省略画」は、深刻な家族葛藤があり、特定人物へのこだわりがある状態にあることが示された。男子第3成分、女子第1成分の「小さく凝集した室内画」は、家族の一体感を願い、それにこだわっている状態にあることが示された。男子第4成分、女子第4成分の「動きはあるが非同一画」は、家族員個々が自分の役割を担い、個々に活動している状態にあることが示された。女子第3成分の「接近して家族を見る画」は臨床像にまとまりがなく、意味づけを保留した。

(3) 各類型(成分)と日本の非行少年の類型を比較したところ、「家族員の多くの省略画」のように、家族イメージ自体を成分させられない場合には、タイ、日本双方とも、共通して非常に否定的な意味合いがあることが示された。また、「動きはあるが非同一画」のように、人物の動きが非同一であることは、日本では非常に否定的な意味合いがあるのに比べ、タイでは、対照的に、不満は小さく、比較的肯定的な意味合いがあり、タイが家族の結び付きのより緩やかであることがこうした差異に大きく影響していることが示された。また、「小さく凝集した室内画」のように、小さく凝集して描かれた家族像については、家族の一体感を願いそれにこだわっている状態は共通していたが、その場所がタイでは室内に、日本では、屋外・自然のなかに家族像を置くという対比が見られ、住居環境による屋内、屋外の日常性の違いも示された。

(4) また、類型化により、タイ王国の特有の意味づけが可能な家族画徴標として、「人物の棒表現」、「家族の場所の室内と戸外」、「家族の非同一の動き」について、それぞれの意味合いが

示された。

本文註

- * 1 矢野暢「東南アジア世界の構図」日本放送出版協会 P56
- * 2 家族画の描かせ方(教示法)には、様々な方法が普及している。Hulse, W.らによる「あなたの家族を描きなさい。」(FDT)Cormanの「ある家族を描きなさい。」(DAF)。Burns, R, Cらによる「家族が何かをしているところを描きなさい。」(KFD)。等が代表的な方法として広く採用されている。本研究では、その性質に照らし、家族画研究会(現「日本描画テスト・描画療学会」)が、統計的調査を実施する際の標準的教示として提唱(1984)した「『私の家族』という絵を描きなさい。」(「私の家族」画)という教示法を採用した。
- * 3 今回の研究では、当初、描画情報以外の変数として描画以外の質問紙調査も行ったため、あらかじめ、その質問紙調査に一部でも不明回答があった被調査者については、分析対象から除いた。また、人物なし画についても、一種の失敗反応とみなして対象から除いた。人物なし画の出現は、男子8人、女子10人であった。
- * 4 藤掛(1989b)の研究では、本研究と同様に、主要な家族画徴標の出現パターン分析を数量化Ⅲ類の手法により行っている。本研究との手続き上の相違点として①家族画教示が「家族が何かをしているところを描いてください」(KFD)という動的なものを用いていること、②分析項目では、かなり類似しているが、藤掛(1989b)の研究では、描画後質問の情報をも対象として変数を設定していること等があげられる。
- * 5 人間関係を規定するルールは、日本社会のように、なんらかの場や社会の習俗や精神が、構成員をひとしく縛るといふかたちでは存在しない。むしろ傍らに、誰がいて、それとある個人がどのような関係が立つのか、という問柄の論理によっている。そして、個人の行動についても、個人の判断による行動の許容範囲がたいそう大きい。(矢野暢、東南アジア学への招待・上、116P、日本放送出版)

参考文献

- Burns, R.C. & Kaufman, S.H. (1927) (邦訳, 「子どもの家族画診断」, 黎明書房。)
- 藤掛明(1989a)二つの質問をめぐって・非行少年の絵を読む12, 少年補導397, 大阪少年補導協会
- 藤掛明(1989b)非行少年の家族認知の分析・質問紙法及び描画法による類型化とその臨床像の検討, 矯正研修所21回研究科論文, 法務省矯正研修所
- 藤掛明(1990a)非行少年の家族関係をめぐって・ソディ法と描画法による取り組み, 現代のエスプリ273, 至文堂
- 藤掛明(1990b)家族イメージのなかの「ひと」と「もの」・非行少年たちの「家族画」から, 少年補導409, 大阪少年補導協会
- 石川元(1989)家族画(FDTとDAF)と合同動的家族画(KFD), 臨床描画研究Ⅰ, 金剛出版。
- 加藤孝正(1986)動的家族画(KFD), 臨床描画研究Ⅰ, 金剛出版。
- 武田繁好(1989)母親に暴力を振るった甘えの強い少年, 家族画ガイドブック, 矯正協会
- 鷹村アヤ子(1989)家族画の形式分析について, 家族画ガイドブック, 矯正協会
- 田中宏(1989)少年鑑別所における家族画の活用, 家族画ガイドブック, 矯正協会
- 脇野満寿美(1987)描画に現れる家族イメージ・非行少年と高校生の家族画の比較を通して, 大阪教育大学修士論文
- 矢野暢(1984)東南アジア世界の構図, 日本放送出版協会
- 矢野暢(1983)東南アジア学への招待(上下), 日本放送出版協会

■表1 家族画の分析項目、分析基準

項目1：人物（群）像の占有空間の大きさの評定

(1)大。(2)中。(3)小。

描画中に人物像の占める空間の割合を2/3以上(大), 1/9~1/3(中), 1/9以下に分類する。割合の判断は、用紙を九分割し、人物像が僅かであっても描かれているセルを勘定する。セル6枚以上を大, 5枚~2枚が中, 1枚を小と評定する。

項目2：自己像の省略

(1)省略有り。(2)なし。

描画中の自己像の省略の有無を評定する。

項目3：最大人物像の評定

(1)自己像。(2)父親像。(3)母親像。(4)他。

項目4：人物（群）像の動きの特徴についての評定

(1)同一の動き。(2)非同一の動き。(3)動きなし。

項目5：特殊描画法の存在の評定

(1)プロット, 鳥かん図。(2)棒表現, シルエット表現。(3)後ろ姿。(4)空白の顔。(5)なし。

項目6：場所の評定

(1)室内。(2)戸外。(3)車中。(4)自然。(5)場所の描写なし。

描画中の人物群の描かれた場所を評定する。室内と戸外の双方が描かれている場合には、最大人物像の描かれた場所を基準に評定する。また、戸外と自然が双方が描かれていては、戸外と評定する。

項目7：テーマの評定

(1)食事。(2)団らん, TV視聴。(3)娯楽, スポーツ, 共同作業, 散歩。(4)テーマなし。不明。

項目8：事物の出現

(1)食卓。(2)流し台。(3)食物。(4)家具。(5)テレビ。(6)電灯。(7)家屋。(8)車。(9)動物。(10)木・草・花。(11)太陽。(12)山。(13)海・川。(14)道。

■表 2 家族画微標の出現

	タイ王国		日本(脇野1987)	
	男子 N=127	女子 N=87	男子 N=110	女子 N=43
1：占有空間の大きさ				
(1)大。	15(11.8)	17(19.5)	17(15.5)	8(18.6)
(2)中。	94(74.0)	59(64.4)	74(67.5)	26(60.4)
(3)小。	18(14.2)	14(16.1)	19(17.3)	9(20.9)
2：自己像の省略				
(1)省略有り。	***22(17.3)	**23(26.4)	60(54.5)	22(51.1)
(2)省略なし。	105(82.7)	64(73.0)	50(45.5)	21(48.9)
3：最大人物像				
(1)自己像。	18(14.2)	14(16.1)	10(9.1)	8(18.6)
(2)父親像。	50(39.4)	*28(32.2)	37(33.6)	5(11.6)
(3)母親像。	38(29.9)	+34(39.1)	36(32.4)	24(55.9)
(4)他。	21(16.5)	11(12.6)	27(24.5)	6(14.0)
4：動きの特徴				
(1)同一の動き。	52(40.9)	***44(50.6)	38(34.5)	7(16.3)
(2)非同一の動き。	***42(33.1)	17(19.5)	12(10.9)	4(9.3)
(3)動きなし。	***33(26.0)	*26(29.9)	60(54.5)	22(51.2)
5：特殊描画法				
(1)鳥かん図等。	4(3.1)	3(3.4)	—	—
(2)棒表現等。	***32(25.2)	**18(20.7)	3(2.7)	1(2.3)
(3)後ろ姿。	2(1.6)	4(4.6)	9(8.2)	0(0.0)
(4)空白の顔。	4(3.1)	2(2.3)	5(4.5)	1(2.3)
(5)なし。	85(66.9)	60(69.0)		
6：場所の評定				
(1)室内。	***16(12.6)	*10(11.5)	38(34.5)	11(25.6)
(2)戸外。	***83(65.4)	***57(65.5)	11(10.0)	3(7.0)
(3)車中。	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
(4)自然。	8(6.3)	1(1.1)	9(8.2)	3(7.0)
(5)場所なし。	***20(15.7)	***19(21.8)	52(47.3)	26(60.5)
7：テーマの評定				
(1)食事, 会話。	***13(10.2)	14(16.1)	41(37.3)	11(25.6)
(2)娯楽, 散歩。	*41(32.3)	*22(25.3)	17(15.5)	3(7.0)
(3)他, 不明。	30(23.6)	*25(28.7)	18(16.4)	21(48.8)
(4)なし。	43(33.9)	26(29.9)	34(30.9)	8(18.6)

8：事物の出現

(1)食卓。	***9 (7.1)	7 (8.0)	26(23.6)	5(11.6)
(2)流し台。	*0 (0.0)	2 (2.3)	7 (6.4)	3 (7.0)
(3)食物。	13(10.2)	9(10.3)	16(14.5)	3 (7.0)
(4)家具。	14(11.0)	*15(17.2)	12(10.9)	1 (2.3)
(5)テレビ。	+8 (6.3)	5 (5.7)	15(13.6)	4 (9.3)
(6)電灯。	1 (0.8)	0 (0.0)	5 (4.5)	1 (2.3)
(7)家屋。	***96(75.6)	***58(66.7)	12(10.9)	3 (7.0)
(8)車。	***18(14.2)	+1 (1.1)	1 (0.9)	4 (9.3)
(9)動物。	***70(55.1)	+25(28.7)	2 (1.8)	6(14.0)
(10)木, 草, 花。	***93(73.2)	***52(59.8)	12(10.9)	6(14.0)
(11)太陽。	***70(55.1)	22(25.3)	6 (5.5)	5(11.6)
(12)山。	***23(18.1)	*17(19.5)	4 (3.6)	1 (2.3)
(13)海・川。	6 (4.7)	4 (4.6)	5 (4.5)	1 (2.3)
(14)道。	***56(44.1)	**23(26.4)	7 (6.4)	1 (2.3)

+ 10%水準。 * 5%水準。 ** 1%水準。 *** 0.1%水準。

■表3 家族画微標の出現パターン分析のための項目

項目1：人物（群）像の占有空間の大きさの評定。

(1)大。(2)中。(3)小。

項目2：最大人物像の大きさ

(1)大。(2)中。(3)小。

表1. 項目3の結果を用い、便宜的に、90mm以上を大、90mmから30mmを中、30mm以下を小と、評定した。

項目3：自己像の省略

(1)省略あり。(2)なし。

項目4：人物（群）像の動きの特徴についての評定

(1)同一の動き。(2)非同一の動き。(3)動きなし。

項目5：棒表現, シルエット表現

(1)あり。(2)なし。

項目6：場所の評定

(1)室内。(2)戸外, 自然。(3)場所の描写なし。

項目7：自己像に最も近くにいる人物

(1)親。(2)他。

■表 4 - a 家族画徴標の数量化Ⅲ類の結果 (男子)

	成分 1	成分 2	成分 3	成分 4
項目 1 占有空間(1)	3270	1225	0885	1038
(2)	-1416	2656	0744	-3226
(3)	-0251	-0704	-0284	0452
項目 2 最大人物(1)	2191	0354	0380	0902
(2)	0141	-0796	-1382	-0738
(3)	-1515	0860	1634	0450
項目 3 自己省略(1)	-1039	2612	-2077	-0077
(2)	0218	-0547	0435	0016
項目 4 人物動き(1)	0041	-0570	0839	-2172
(2)	-0715	-1078	-0997	2241
(3)	0845	2271	-0054	0571
項目 5 棒表現 (1)	0666	-0134	-0511	-0420
(2)	-1978	0398	1517	1246
項目 6 場所 (1)	-0943	0391	2296	1416
(2)	-0566	-0422	-0724	-0445
(3)	2567	1167	0900	0550
項目 7 最近距離(1)	0339	-1112	1253	-0331
(2)	-0314	1028	-1158	0306
固有値	306	247	202	160

■表 4 - b 家族画徴標の数量化Ⅲ類の結果 (女子)

	成分 1	成分 2	成分 3	成分 4
項目 1 占有空間(1)	-1767	0817	2090	0706
(2)	-0066	-0450	-0908	-0720
(3)	2408	0809	1092	2023
項目 2 最大人物(1)	-1345	0831	1230	0142
(2)	-0061	-0686	-1747	0107
(3)	2839	0010	1799	-0545
項目 3 自己省略(1)	1112	1919	-1402	1415
(2)	-0400	-0690	0504	-0508
項目 4 人物動き(1)	0460	-0496	0612	-0629
(2)	-0570	-1526	-0009	3466
(3)	-0406	1837	-1030	-1202
項目 5 棒表現 (1)	-0465	0257	0040	0627
(2)	1782	-0987	-0154	-2403
項目 6 場所 (1)	2371	0865	3030	-0065
(2)	0072	-0966	-0522	0441
(3)	-1467	2493	-0003	-1313
項目 7 最近距離(1)	-1147	-1334	-0923	0500
(2)	0604	0702	0486	-0263
固有値	325	245	186	148

■表5-a 家族画類型と事物の出現の相関（男子）

	正の相関	負の相関
1 類型	なし	家屋, 動物, 木草, 太陽, 山, 道 (車, 海川)
2 類型	なし	家具, 家屋, 木草, 海川, 道 (車)
3 類型	なし	家屋, 木草, (太陽)
4 類型	なし	(家具)

* 5%水準で有意な差のあったもの。
括弧内は10%水準

■表5-b 家族画類型と事物の出現の相関（女子）

	正の相関	負の相関
1 類型	家屋, 動物, 木草, 山	(食物)
2 類型	なし	家屋, 木草, 道, (太陽)
3 類型	食卓, 家具, TV	食物, (車)
4 類型	動物, 山 (車)	(太陽)

* 5%水準で有意な差のあったもの。
括弧内は10%水準

■表6

	第1成分	第2成分	第3成分	第4成分
タイ男子非行群				
・成分の命名	背景のない大家族画	家族員の多くの省略画	小さく凝集した室内画	動きはあるが非同
・家族画徴標からの意味づけ	家族への関心は強いが、現実の家族像を十分に受け入れられない	深刻な家族葛藤があり、特定人物へのこだわりがある	家族の一体感を願う、それにこだわっている	相互交流が希薄であり結び付きが弱い
・事例検討からの修正	修正なし	修正なし	修正なし	家族員個々が自分の役割を担い、個々に活動している
タイ女子非行群				
・成分の命名	小さく凝集した室内画	家族員の多くの省略画	接近して家族を見る画	動きはあるが非同
・家族画徴標からの意味づけ	家族の一体感を願う、それにこだわっている	深刻な家族葛藤があり、特定人物へのこだわりがある	家族への関心が高く、その影響を大きく受ける	相互交流が希薄であり結び付きが弱い
・事例検討からの修正	修正なし	修正なし	まとまりがなく、意味づけを保留	家族員個々が自分の役割を担い、個々に活動している

■表 7

	第1成分	第2成分	第3成分	第4成分
日本男子非行群	家族イメージ不成立画	小サイズの屋外レジャー画	見おろした食卓プロット画	動的であるが非同一画
日本類型の徴標	<ul style="list-style-type: none"> ・動き:なし ・テーマ:交流なし ・自己像省略:あり ・描後質問:嫌い場面 	<ul style="list-style-type: none"> ・場所:車中 ・場所:自然 ・特殊:棒・シルエット表現 ・テーマ:娯楽, スポーツ等 	<ul style="list-style-type: none"> ・特殊:プロット・鳥かん ・手の動き:省略・後手 	<ul style="list-style-type: none"> ・動き:非同一 ・特殊:空白の顔 ・描後質問:事物描写 ・テーマ:団らん・会話
日本類型の意味づけ	深刻な家族葛藤を持ち、特定の人物へのこだわり	現実の家族にとけ込めず回避的	家族から距離を置きながらのかかわり	相互交流が希薄であり家族に対するとまどい
臨床像	深刻な家族葛藤 家族への接触も乏しい 最も深刻な適応状態	家族からの規制に反発 急速に家族からの離反	家族との半端な関わり 漠然とした不全感	相互交流が希薄 家族に対するとまどい 1成分について深刻

■表 8

タイ男子非行群	②家族員の多くの省略画	④動きはあるが非同一画	③小さく凝集した室内画	①背景のない大家族画
タイ女子非行群	②家族員の多くの省略画	④動きはあるが非同一画	③小さく凝集した室内画	③接近して家族を見る
日本男子非行群	①家族イメージ不成立画	④動的であるが非同一画	②小サイズの屋外レジャー画	③見おろし食卓プロット画
描画の比較	ほぼ同じ	ほぼ同じ	家族が小さく凝集している点が共通。場所が室内と、自然で相違。	家族との距離のとり方に特徴。接近するのと、遠望する相違点。
臨床像の比較	ともに深刻な家族葛藤	日本では、相互交流希薄。家族葛藤サイン。タイ王国では、家族員の個々に自分の役割を担う。不満はあるが適応サイン。	理想像, 願望として描出。家庭への期待と依存あり。日本は、家庭から離反。タイ王国は、表向き平穏。	日本では混乱, 両価, 不全感。タイ王国では、臨床像のまとまり弱い。男子では葛藤の持続, 困惑。

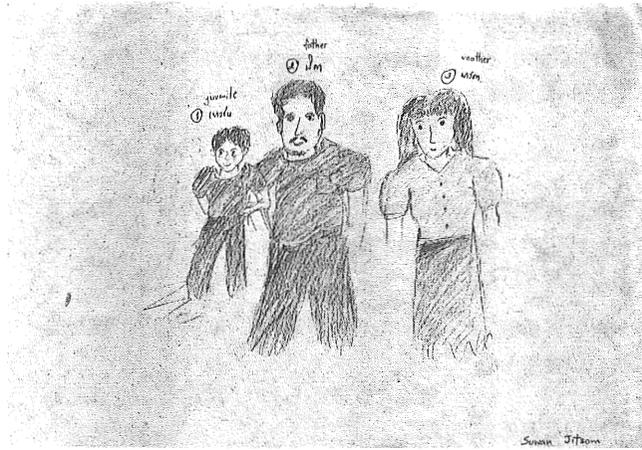


图 1

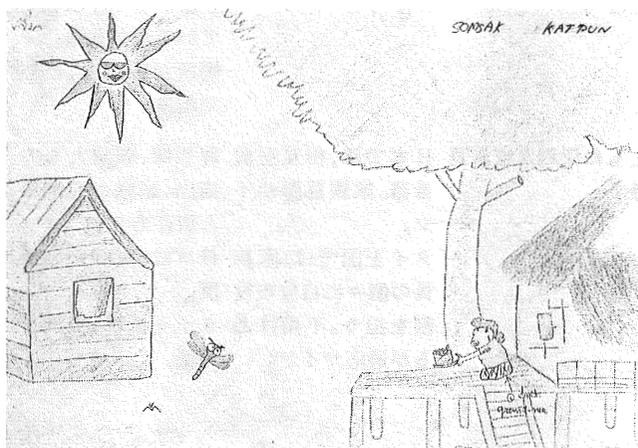


图 2

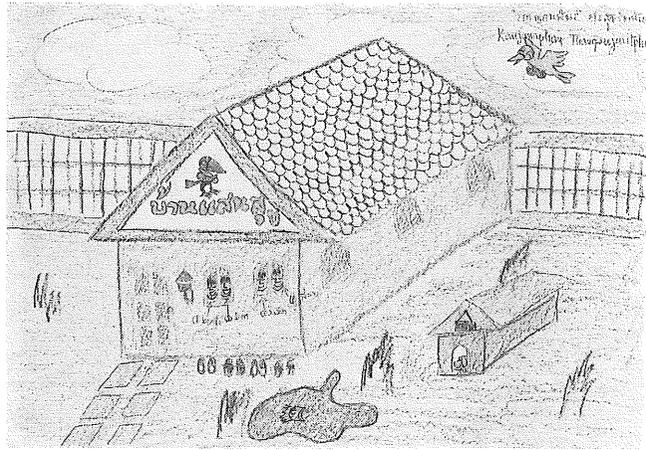


図 3



図 4

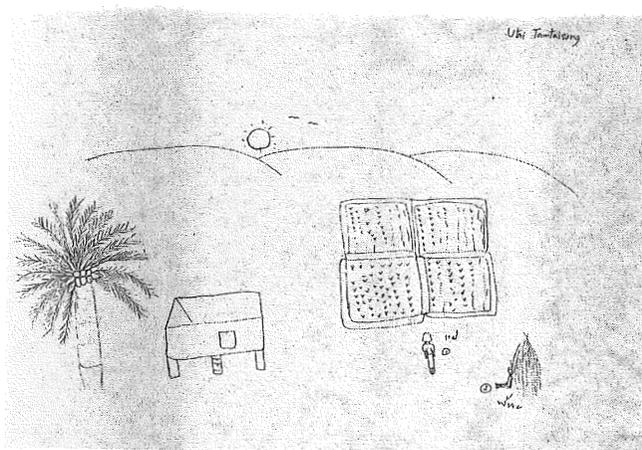


図 7